

【映像】

第15回アートフィルム・フェスティバル」

会 期：2010年11月19日(金)～24日(水)、30日(火)～12月5日(日) [12日間]

会 場：アートスペースA

入場者数：601名(延べ)

■関連展示

「名古屋シネマテーク所蔵 ドキュメンタリー&アニメーション映画ポスター展」

会期 2010年11月23日(火・祝)～12月5日(日) *月曜休館 [12日間]

会場 愛知芸術文化センター12階アートスペースG

入場者数 779名(延べ)

■主旨

「アートフィルム・フェスティバル」は、映像表現の新たな可能性を切り拓く作品を、既存のジャンル区分を横断する視点から取り上げる特集上映会で、例年、秋から冬に掛けて約2週間開催する、実験的な映像作品や、非商業的なインディペンデント系(独立系)の作品を集中的に鑑賞できる機会として定着している。

劇映画、ドキュメンタリー、実験映画の三つを主要なジャンルとして、今日の映像表現が形成されているが、実際の作品を観てゆくと、実験映画でありながらドラマ形式を採っているのが劇映画に近いものがあったり、あるいは劇映画として上映されているものの、監督が持つ独自の方法論やスタイルを極限的に追求することで、ほとんど実験映画と見紛うような作品も登場している。

また映像には、演劇や音楽、美術など、異なるジャンルの表現と積極的に関係を結び、それらを取り込んだり、あるいは境界線を取り払い融合化してゆくという、メディアそれ自体が持つ特性がある。そのため映像作品であるとともに、音楽の占める比重の高いものや、映像とダンスが融合したようなコラボレーション的作品も登場している。

このような映像表現の今日の状況を踏まえ、映像分野内でのジャンル区分の越境や、他ジャンルとの融合や逸脱といった興味深い現象に焦点を当て、〈交差する視線—日仏ドキュメンタリー&アニメーション作品集—〉〈映像と音楽のコレスポンド〉〈オリジナル映像作品新作プレミア&アンコール〉の三つのプログラムによりフェスティバルを構成し、映像表現のヴィヴィッドで、先端的な状況を照らし出すことを意図した。

■結果

〈交差する視線—日仏ドキュメンタリー&アニメーション作品集—〉は、アリアンス・フランセーズ愛知フランス協会の協力により、近年の優れたフランスのドキュメンタリーとアニメーション作品を紹介し、これを受ける形で、当センターが独自にセレクトした日本の若手作家による同ジャンルの作品を併せて上映した。フランス・ドキュメンタリーでは、セネガルからヨーロッパに渡る難民の厳しい現実を描いた『バルセロナあるいは死』(イ

ドリッサ・ギロ、2007年)や、スラムと呼ばれる新しい詩の朗読のムーブメントを捉えた『スラム、我々を燃え立たせるもの』(パスカル・テッソー、2007年)など、日本ではあまり伝えられていない現実を知る貴重な機会となった。フランス作品が比較的オーソドックスなスタイルが多いのに対し、日本の作品は、ドキュメンタリーとフィクションを融合した実験作『ここにいることの記憶』(川部良太、2007年)や、ジョナス・メカスを嚆矢とする日記映画の形式に連なる『ぬばたまの宇宙の闇に』(金子遊、2008年)など、形式を逸脱するようなものが少なくなかった。

アニメーションでは、日仏両国とも、プリミティブな手描きドローイングを用いたものから、コンピューター・グラフィックス(CG)を導入した作品まで、多彩な技法が試みられている現状が上映作から伺えた。

〈映像と音楽のコレスポンド〉では、即興音楽についてデヴィッド・シルヴィアンがプロデュースし、フィル・ホプキンスや大友良英らの貴重な証言インタビューで構成した『Amplified Gesture』(フィル・ホプキンス、2009年)や、高木正勝のコンサートを記録した『或る音楽』(友久陽志、2009年)、現在、東京都現代美術館に出品されている高木正勝の新作映像作品『Ymene(イメネ)』(2010年)を上映。映像系の観客に加え音楽ファンも来場し、盛況であった。七里圭の新作『ASPEN』(2010年)は、クラムボンのプロモーション・ビデオとして制作されたもので、ダンサーの黒田育世が出演するという、まさに映像×音楽×ダンスのコラボレーション作品という希有な完成度を示していた。未公開に終わったバージョンと、公開されているバージョンの二つを連続上映する貴重な機会といえる。「音楽を奏でる映画の体験」は、音楽との関係を重視した実験アニメーションを集めたプログラムであるが、来場した音楽ファンも作品を楽しんでいたことが印象的だった。

〈オリジナル映像作品新作プレミア&アンコール〉では、まずアンコールとして、今年6月1日、103歳で逝去された舞踏家・大野一雄のドキュメンタリー『KAZUO OHNO』(ダニエル・シュミット、1995年、オリジナル映像作品第4弾)上映。岩手県岩崎地区に伝わる民俗芸能・鬼剣舞を題材に、人間にとって身体表現とは何かという根源的な問いに迫る『究竟の地—岩崎鬼剣舞の一年』(三宅流、2007年、同第16弾)をカップリングした。シリーズ最新第19弾となる『ギ・あいうえおス—ずばぬけたかえうた—』(柴田剛、2010年)の初公開に併せて、名古屋では未公開であった柴田監督のデビュー作『NN-891102』(1999年)も同時上映した。劇映画の形式を採りながらも、初期から一貫して音についての関心を示してきた柴田の新作『ギ・あいうえおス』は、観客が映画における音を体験する、いわば体感型の映画というべき、観客の身体性に直接訴える作品であった。これまでにはなかったタイプのテーマ“身体”へのアプローチを示した作品という点で、観客からはシリーズ・ベストワンと推す声も上がるなど、好評であった。